友達の国を知ろう

氏名：中村 寛子　　学校名：神戸市立兵庫大開小学校
担当教科：全教科　　実践教科：特別活動（学活）
時間数：9時間　　対象学年：小学校1年生　　人数：1年生3クラス　計94人

【実施概要】

<table>
<tr><td colspan="3">【1】単元のテーマ・目標（評価の観点を意識して設定）：</td></tr>
<tr><td colspan="3">学級や学年にいる外国にルーツをもつ児童の困り感に寄り添うと共に、その児童の国の人々のくらしや文化に親しむことができる。</td></tr>
<tr><td rowspan="3">【2】
単元の評価
規準例</td><td>（ア）知識・技能</td><td>日本との違いや、言葉が通じないことによる難しさを理解している。</td></tr>
<tr><td>（イ）思考・判断・表現</td><td>友達の困り感について考え、友達の国の文化について知ったことを中国すごろくに表そうとしている。</td></tr>
<tr><td>（ウ）主体的に学習に取り組む態度</td><td>友達の国や他国の文化について興味をもって、クイズを考えようとしている。</td></tr>
<tr><td>【3】
単元設定の理由

✓ 児童/生徒観
✓ 教材観
✓ 指導観
✓ 設定時に想定された児童・生徒の変容</td><td colspan="2">【単元設定の理由】
地域には外国人が多く定住し、本校にも外国にルーツをもつ児童がどの学級にも在籍している。市内在住の外国人の方を講師に招いて、その国について理解を深める「こうべ地球っ子プログラム制度（神戸市教育委員会による国際理解教育推進プログラム）」を活用し、毎年１年生で中国についての学習を行っている。ともに学校生活を送り、一見すると共生しているようだが、様々な場面で課題が見えてきている。例えば、友人関係でトラブルがあると「〇〇人だから」という言葉を児童や保護者が口にしていることがあった。
そこで、まずは一番多くの児童が在籍している中国の文化について単元を組み、低学年のうちに体験的な活動を通して中国にルーツをもつ児童の困り感に寄り添い、中国の文化に親しむ学習をさせたいと考えた。児童が中国を単なる外国としてではなく、身近な友達の国として知る機会を作ることで、親しみをもって関わることができるようにし、また他国の文化について肯定的に学ぶことで、外国にルーツをもつ児童との関わり方を考えさせたい。
【児童/生徒観】
本学級には、日本語指導が必要な外国にルーツをもつ児童が複数名在籍している。これまでに、学級では毎朝、友達の国の言葉であいさつを行ってきた。漢字学習では、中国の字体も紹介し、中国ルーツの児童の活躍の機会を作ってきた。児童は外国語活動の時間では、ALT との交流を楽しみ、意欲的に取り組んでいる。しかし、国語科の音読発表会の練習では、外国にルーツをもつ児童に対して、「ちゃんと読んでよ。」という言葉を</td></tr>
</table>

なげかける児童がいた。日本語での意思疎通ができるだけに、日本語を母語としない児童の困り感に気付いていないことがうかがえた。そこで、友達の国の文化に親しみ、その違いや困り感を理解することで、「共生」への第一歩につなげようと考えた。

【教材観】

この教材は、本校に在籍する外国にルーツをもつ児童に焦点を当てた教材である。文化の違いや、日本語が分からないことで起こる戸惑いを体感することで、自分たちが外国にルーツをもつ友達に対してできることを考え、友達の国についてより深く知ろうとする学習である。学んだことを生かして中国クイズを作り、それをすごろく形式にして遊ぶという異学年交流を通して、他の学年の児童にも友達の国を知るきっかけとなることを期待している。また、どの学級にも外国にルーツをもつ児童が在籍しているため、全学年で実施でき得るものであると考える。

【指導観】

まず、日本と違う文化に触れる機会をもつ。これまでの外国語活動で学んだアメリカと日本の違いの内容も振り返り、フォトランゲージを活用して生活の違いをいくつか紹介する。この際に、否定的な意見が出ないよう、国によって「あたりまえ」は違うことを押さえたい。また、多言語アナウンスで、日本語が分からない状況を作り、どのような困り感があるのかを気付かせたい。ここでは、持ち物や教室移動など、学校生活の中での出来事をアナウンスすることで、児童がより自分事として困り感に気付けるようにしたい。

次に、学年の友達の保護者をゲストティーチャーに招いて話を聴くことで、中国についてより身近に感じられるようにしたい。

そして、学んだことや調べたことを中国クイズにまとめ、異学年交流という形で発信することで、もっと知ろうとする意欲につなげたい。

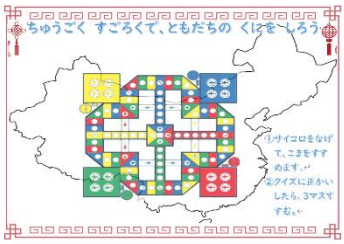
また中国とひとくくりにしても、多くの民族が混在している。ここで知ったことが全てではなく、中国のごく一部であることに留意して指導したい。

【設定時に想定された児童・生徒の変容】

友達の国について、学年に在籍する外国にルーツをもつ児童の保護者から話を聴くことで、身近にとらえることができ、他国の文化に親しむ姿が期待される。さらには、そういった児童の姿から、他学年の児童や周囲の大人が「共生」の大切さについて気付くきっかけとしたいと考えている。

【4】展開計画（全９時間）

時	テーマ・ねらい	活動・内容	使用教材
1 本時	「ちがう」「分からない」について考えよう。 1. 日本のあたりまえは、世界でもあたりまえなのか？ 2.「分からない」を体験しよう。 3. 自分にできることを考えよう。	1. 日本とは違う習慣を写真で見る。 2. 多言語アナウンスの校内放送を聞く。外国語で書いてある、たし算の問題を解く。 3. 分からなくて困っていた時、周りの人たちにどうしてほしかったかを考えて発表する。	・写真（作成） ・多言語アナウンス（作成） ・中国、ネパールの１年生の教科書（兵庫県 子ども多文化共生センターより）

2 ・ 3	中国について知ろう① 地球っ子プログラム講師からの話を聴き、一般的な中国について知ろう。 （児童が自主的に自由帳にメモを取っている様子。）	中国人講師による世界地図での中国の場所、日本との人口の違い、学校の様子、漢字のルーツについて、歌の紹介 （講師の話を、身を乗り出して聴いている様子。）	講師作成の資料
4	中国について知ろう② お家の人の話を聴こう。 （中国の小学１年生の教科書を見て、漢字の多さに驚いている様子。）	保護者をゲストティーチャーに招いて、中国についてのお話を聞く。 ①私の好きな食べ物 ②動物 ③有名な場所、私のおすすめの場所 ④服、文字、遊び、など 	保護者、子ども多文化共生サポーターの先生作成の資料 インタビューシート
5	伝えたいことを決めよう。 中国の〇〇クイズを作ろう。	話を思い出して、伝えたいことを決める。 各班で写真をもとに中国クイズを作る。 GIGA 端末(一人一台 PC)で検索する。 ①食べ物 ②動物 ③有名な場所、おすすめの場所 ④服、文字、遊びなど	２～４時の資料写真 中国すごろくマップ 関連書籍 50 冊 GIGA 端末 (株式会社明治のサイト「比べてみよう！世界の食と文化」)
6	作成した中国クイズを使って、クラスで交流しよう。  	各クラスが作ったクイズを合わせて、すごろくをする。 	中国クイズ 中国すごろく
7 ・ 8	作成した中国クイズを使って、ペア学年と交流しよう。 ※３学期に実施	ペアの６年生と交流する。 ２年生と交流する。	中国クイズ 中国すごろく
9	他国の文化についても調べてみよう。 ※３学期に実施	書籍、GIGA 端末を使って、気になる国について調べる。 ①食べ物 ②服 ③遊び ④有名な場所、おすすめの場所	関連書籍 50 冊 GIGA 端末 (株式会社明治のサイト「比べてみよう！世界の食と文化」) (キッズ外務省サイト)

【5】本時の展開

本時のねらい：日本と違う文化について知り、友達の困り感について考えることができる。

過程 時間	学習活動	指導上の留意点（支援）	資料（教材）
導入 (5 分)	１．写真をもとに日本と違う習慣を写真で見る。	・本時の写真を見せる前に、外国語活動で学んだ、日本とアメリカの違いを思い出させる。	写真 ・手で食べる。 ・「いただきます」がない。 ・食べる前に、床に食べ物を置く。 ・器の中に少し残す。 ・トイレでは、水・手で流す。
	「ちがう」「分からない」とはどういうことか、考えよう。		
	・ちがう。 ・手を合わせていないとだめ。 ・なんだか、へん。 ・国が違うから、悪いことではない。 ・そういうことをする国もある。	・「日本と違うことは、ダメなことなのか。」「本当に汚いのだろうか。」と問いかけることで、国が違えば、あたりまえが変わることに気付かせる。	
展開 (20 分)	２．「分からない」を体験する。 ・分からない。 ・何を言っているのか、全然分からない。さっぱり。 ・疲れる。いやになる。 ・ぜったいに、分かるわけがない。 ・やりたいのにできない。くやしい。 ・読んでくれたら分かるのに。	・放送中に感じた、「分からない」や「もやもやする感情」を、ワークシートに書いて発表させる。 ・たし算の問題で、簡単な問いなのに言葉が分からないと解けない苛立ちを感じさせる。 ・児童から「読んでくれたら分かる。」と意見が出たところで、ルビうち問題を見せ、それでも意味が分からないと困ることを体験させる。	外国語アナウンス ・休み時間になりました。今日は外に出れる？出れない？ ・次の時間は、体育？図書？ ・掃除が終わったら、帰る用意？漢字の学習？
まとめ (20 分)	３．分からなくて困っていた時、周りの人たちにどうしてほしかったかを考えて発表する。 ・動きで伝える。 ・絵に描いて説明する。 ・準備を一緒にする。 ・次の用意を教える。 ・問題の意味を教える。 ・「分かる？」と、聞いてほしい。	・「教室内でこのような思いをしている友達はいないだろうか。」と、なげかけることで、教室で日本語指導が必要な児童が日常的に困っていたことに気付かせる。 ・児童が考えにくい様子があれば、ロールプレイで何人かに演じさせて、意見が出やすくする。 ・友達のことを理解するために、次時から中国について知ることを伝える。	外国語で書いてあるたし算の問題。 中国、ネパールの１年生の教科書（兵庫県子ども多文化共生センターより） 振り返りのワークシート

【授業実践の様子】

本時作成の資料

【6】本時の振返り

まだ十分に気持ちを言語化できない児童もいるため、「分からない」を体験する活動では、「ええ」「無理」とつぶやいて考えをやめてしまう児童や、集中力が途切れてしまう児童もいた。その様子をとらえて、代弁することも必要だと感じた。

まとめの活動では、日本語指導を必要とする児童が、「あっ、それ、わたしのことだ。」「いつも分からへんねん。」と、自分の言葉で話せたことが大きかった。分からなくて困っている友達にどう関わるかについて考えたことで、外国にルーツをもつ児童だけでなく、学びに課題のある児童からの意見も活発に出たことが意外な効果だった。国際理解として取り組んだが、困り感がある全ての児童への支援につながることを実感した。

【7】単元を通した児童生徒の反応/変化

世界地図で中国や他の児童の国、ALT の国を探したり、オリジナルのクイズを作ったりと、積極的に関わろうとする姿が見られた。学習のまとめとしてすごろく形式で遊ぶことで、楽しみながら活動ができ、もっとやってみたい、もっと調べでオリジナルクイズを作りたいと、主体的に取り組もうとする姿が見られた。

以下、児童の感想より。（抜粋）

・中国からいろいろなものが来たなんて、すごい。おぼえておきたい。
・中国すごろくが面白かった。中国クイズをもっとしたいし、中国のことをもっと知りたい。
・いっぱい学べたので、次は違う学年に中国クイズをしたい。
・ママに中国クイズをしたよ。ママは全然分からなかったよ。また、難しい問題を出そうと思うよ。私の国のクイズも作ってみる。（ベトナムルーツの児童）
・冬休みにお父さんと中国に旅行に行きたいな。どうやったら行けるかな。
・パンダが中国にしかいないなんて、初めて知った。絶滅の危険がある動物がたくさんいた。生き物って大切だな。長生きするように大事に育てて守る。
・（中国ルーツの児童）もっと違うことも知りたいな。中国の他の場所にも行ってみたいな。もっとおいしいものがたくさんあるから、教えたいな。
・（日本語指導を必要とする児童）わからないし、書けない時もあるけど、「あのねちょう」をいっぱい書けるようにがんばるよ。
・アメリカ(ALT の国)はどんな暮らしをしているのか知りたくなった。
・ケビン先生(ALT)の言葉は分るときと分からない時があるから、英語が分かるようになりたい。

【単元を通し変容した生徒の態度や学習意欲があれば記載下さい】

関連する書籍を約 50 冊用意し、GIGA 端末でも調べられるようにした。また、朝の読書の時間に自分で調べられるようにした。児童はオリジナルの中国クイズを作ったり、家でも話したりして、保護者からも反響があった。興味が広がり、他の国についてこちらが声をかけるでもなく、自ら調べている姿が数多く見られた。単元後に新しく来た ALT に対して、その国を地図で調べようとしたり、「クイズを作りたいから聞きに行こう」「本、GIGA 端末で調べてみよう」としたりする姿も見られた。

日本語指導が必要な児童や、周りで困っている児童に対して、「はやく」「ちゃんとして」という言葉は聞かなくなった。「『分からない』ってどんな気持ちだったかな。」と、問いかけると、「あっ、そうか。」と、自分から動く姿が増えた。

異学年交流については、３学期に実施予定である。上の学年に伝えられることを楽しみにしている。

【授業を通じた途上国・異文化・多文化共生等への意識の変容について記載下さい】
（授業前） ネパールでは食事を手で食べる、アメリカでは歩きながらハンバーガーを食べる（ALT の話）等を、初めて知った時は「なんで」「だめなのに」「汚くないのかな」といった率直な感想が出ていた。
（授業後） 「国が違うから、あたりまえなんだ。」「汚いことではないね。」「意味が分かったら『違う』ことって、面白いし、学べる。」と、肯定的にとらえられるようになった。 中国について書かれている本や、様々な国の文化について紹介してある本を見せながら、外国にルーツをもつ児童に積極的に関わるようになった。また、中国にルーツをもつ児童も、自身の国について知らないこともまだまだ多く、自分で調べるようになった。

【8】自己評価

1. 苦労した点	低学年にとって相手の立場になって考えることは容易ではなく、道徳の授業ではロールプレイや実体験を大切にしてきた。そのため、本単元でも児童が体験を通して考えられる内容が重要であると考えた。そこで、事前研修で行った多言語アナウンスでの防災ゲームを、低学年にも身近に感じられるように学校生活の内容に変えて作成した。 保護者をゲストティーチャーに招くため、内容の打ち合わせや１年生でも分かる内容にすることが必要だった。当日来られない方もいたため、インタビューシートのような形で、様々な保護者の意見が取り入れられると、より多くのことを、より身近に感じられるのではないかと思った。
2. 改善点	多言語アナウンスを流す際に、１年生だとすぐに答えを言ってしまいがちなため、クラスのどの児童にも分からない言語でのアナウンスにした。ただ、そのクラスにいる児童の言語でのアナウンスも取り入れることで、普段とは違って日本語指導が必要な児童が優位に立って活躍する経験ができることも、授業の大きな意義になるのではないかと考える。 今回は、単元を通して、文化の違いに大きく焦点を当てた。しかし、違いのみでなく、日本と同じ部分や、国が違っても共通する思いについても考える時間をとれればより深まるのではないかと感じた。
3. 成果が出た点	児童はもちろんのこと、保護者や教員への反響もあったことが大きな成果だと感じた。どの学年でも実施できるように、汎用性のある教材になることを目指して教材を作成した。そのため、多言語アナウンスを録音してパワーポイント上に添付し、誰もが授業で使える教材にした。その成果もあり、２学年が実施をし、校内でもその反響があった。
4. 備考（授業者による自由記述）	校内での反応が予想以上に早く返ってきたことに驚いた。今後、毎年１年生でこの授業ができるように、さらに改善していきたい。また、市内の研究会でも発信することで、今回の研修で学んだことを還元していきたい。

添付資料：作成資料、海外の教科書（中国、ネパール）、

参考資料：「新版 世界の学校（学事出版）」、「国際理解教育ハンドブック（明石書籍）」、「JICA 地球ひろば主催 国際理解/開発教育指導者研修 授業実践事例集」